

研 究 成 果 報 告 書

(ふりがな) おおや けいや

氏 名 大 矢 奎 哉

現 職 (新潟市立木崎小学校、教諭)

平成29年3月卒業 芸術系コース 美術

形に働きかける行為を通じて思いや
関係性を広げる子どもの育成
— 学びの連続性を大切にしたい実践の報告 —

新潟県新潟市立木崎小学校 大矢 奎哉

1 はじめに

現行の学習指導要領は、「一つ一つの学びが何のためか、どんな力を育むものか」を重視し、「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなす」「見方・考え方」を「教科等の教育と社会をつなぐもの」として作成された。本研究では、小学校で学びを始めた子どもたちにとって大切にしたい「見方・考え方」にアプローチした。

小学校学習指導要領では、資質・能力の三つの柱それぞれの基礎を一体的に育むことを目的とした生活科を軸として教科間の関連を図ることが、幼児教育からの円滑な接続を叶える重要な手立てとしている。幼児教育では、子どもの発達の側面から「5領域」としてまとめ、各領域に示すねらいは幼稚園の生活全体で育まれ、幼児が環境にかかわり、具体的な活動を通して総合的に指導されている。そして、幼児期に育まれた「資質・能力」を、学びを中心とする小学校の教育過程につなぐことが必要とされ、「架け橋期」として取り組まれている。これらを踏まえ、教科として整理された「資質・能力」は「見方・考え方」として捉え、連続性を有している。

小学校図画工作科における造形的な「見方・考え方」に接続する内容は、教育・保育要領での表記上の対応としては五領域のうち「表現」が主に該当すると考えられる。ただし、「表現」の内容として挙げられるものは、造形その他音楽・身体・言語と多岐に渡る。それらを取り扱う具体的な子どもの姿としては身の回りにあるものや生活範囲、また友達をはじめとする他者との関わりなど、他領域との複合的な取り扱いが前提とされている。その点を踏まえ、特に今回の実践との接続として「生活」や「身近な環境」にある「形」や「手触り」、友達や教師など他者との関わりといった要素に着目している。その点を踏まえ、特に今回の実践との接続として「生活」や「身近な環境」にある「形」や「手触り」、友達や教師など他者との関わりといった要素に着目した。

私は、これまでの教員経験の中で、ひとつの題材を実践した後、学びがその先へと繋がられている実感がもてず、課題と捉えていた。その題材が終わればそれっきり、言うならば、子どもに「やらせっぱなし」な状況だったといえる。先に述べた背景を受けて、図画工作科の表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成することを見通した取り組みが必要と考えた。そこで、本実践では、表現や鑑賞と関わる「形」や「材料」といった要素に初めて出合う幼児の経験から接続し、図画工作科を軸として、生活科や国語科と横断することで学びを繋げることを想定した単元を構想した。

2 題材について

(1) 題材名 はっけん！でこぼこたんけんたい

(2) 題材の目標

身の回りにある『でこぼこ』の造形的な面白さなどについて、粘土で型押しをする活動を通して、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げることができる。

(3) 評価基準

【思】・身のまわりの世界を型押しして現れる形のおもしろさ、美しさ、不思議な感じに気づき、さらにしたいことやいろいろな表し方を思い浮かべることができる。

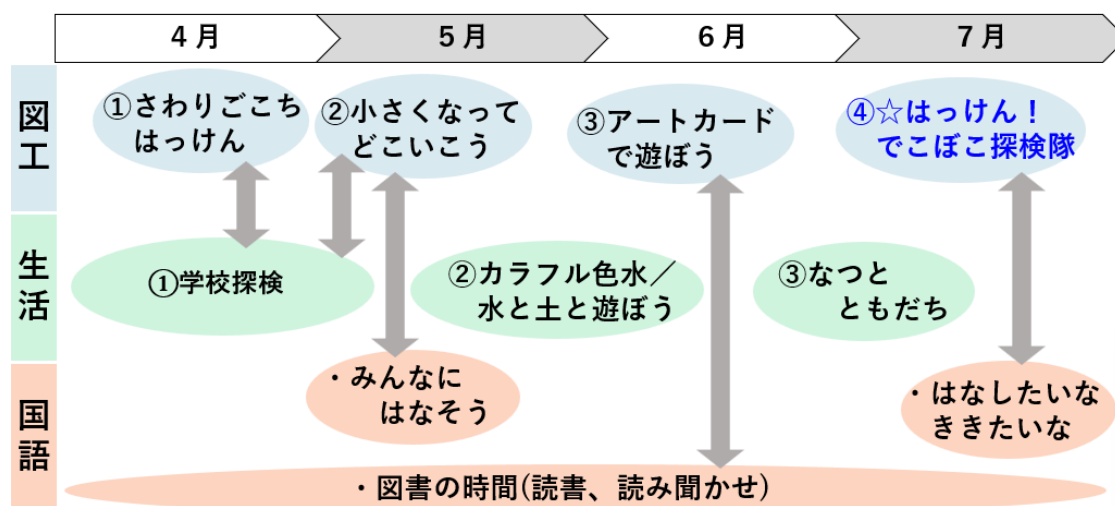
・友達の活動の様子や、型押しした形を見て、おもしろいところやよいところを感じ取ることができる。

3 指導の工夫

[教科を横断した単元指導計画]

生活科における遊びや学校内外の探検の活動をきっかけに、関連した図画工作での学びを通じて、児童自身と空間や人々との関係を広げたり、深めたりできることを想定し、図のように前期の単元を設定した。児童たちは小学校へ入学し、日常生活する空間や初めて出会う人々との関係が大きく変化している。学校内外におけるさまざまな体験や経験をこちらが意図的に繋いでいくことで、児童の学びが様々な教科を横断し、さらに深まっていくと考えた。また、色々な人と関わったり、表現したりする手段である言葉や文字への親しみを深めるため、国語科の学びと関連した課外活動として、毎日必ず、帰りの会には活動や季節に関わる図書の読み聞かせの時間を設定した。

< 1 学期の取り組み・単元構成 >



[前単元の学習を想起させる]

指導にあたっては、図画工作の前題材「さわりごちのはっけん」や生活科の「水と土であそぼう」において、いろいろなものと触れ合った経験を生かす。「でこぼこしたかんじ」「つるつるしたかんじ」「ふわふわしたかんじ」など様々なものの感触を味わい、実際に型押しに適したものをを見つける際の手掛かりとする。単元の導入では、「このかたちは、どこのでこぼこでしょう?」といったクイズの活動を取り入れ、児童の興味・関心がわくような工夫をした。終末には、みんなで作品のよさや面白さを見合う展示形式の鑑賞活動の時間を設けた。

図画工作科 ①さわりごちのはっけん



iPad(ロイロノート)を使用して、触り心地をチャート化・共有



活動を通して、
さわりごちを
自分なりの言葉で
表現・分類する姿

☆表現
☆伝える力

[自由に探らせる]

本時は、前時までの経験を生かし、活動を学校全体に広げ、型押しに適したところを探し、次々と不思議な「でこぼこ」を見つけていく活動である。児童は小学校へ入学し、日常生活する空間や人々との関係が大きく広がってきている。グループで学校内をともに歩き、巡るという授業は、まるで探検に出掛け、宝探しでもするかのようなわくわくする気持ちで取り組むことが想定できる。

また、自分の見方や感じ方を十分に味わって広げられるよう、活動のねらい、約束、安全面

などを児童がしっかり意識して出かけられるよう配慮した。そして、教師は多様な児童を温かく見守ったり、肯定的な声掛けをしたりして、それぞれの見方や感じ方を大切にしていく。

[鑑賞の場の工夫]

本時の後半には、型押ししてできた「でこぼこ」を厚紙に貼りながらみんなで紹介し合う。さらに、自分や友だちの活動の様子を知り、型押しの形を見て、面白いところやよいところを見つける鑑賞の時間を次時に設定する。思いきり学校中を探検した後で、特別教室(多目的室)に設定した「1年2組すてきなかたちのはくぶつかん」に入り、自分や友だちの作品を見る。いつもとは異なった雰囲気の中で、じっくりと作品を見ることで、より深く、自分の活動の振り返りや、友だちの活動を知ることができる。

また、実際にいろいろなものを型押ししてみて、どんな面白さ、楽しさがあったのか、友だちのつけた形を見てどう感じたかなど、互いに聞き合うことでさらに型押しへの興味や、形の面白さへの気付きが深まることへとつなげる。いつもの生活する空間への親しみとともに、これからの生活や、学習の中でも造形的な見方や考え方を生かせるようにする。

4 活動の実際

子どもたちは、普段の学習でも、ペアでの活動に取り組んでいる。グループや班での活動もあるが、ペアの方がより子ども同士の対話が生まれやすいと考えるからである。1年生ということで、初めのうちは、自分のことで精一杯だった子も、少しずつ、友達との活動を楽しむ姿が見られるようになってきた。また、1人では気付かずに見逃してしまうような面白いでこぼこをたくさんみつけることに繋がった。

<第1時：形の探索>



ペア活動を通じて、自分だけでは見逃したであろう形や場所の面白さに気付くことができた。

第2時には、特別教室に設定した展示スペースに各々が形を展示して、型押ししてできた「形」をみんなで紹介し合う活動を行った。いつもとは異なった雰囲気の中で、じっくりと作品を見ることで、より深く、自分の活動の振り返りや、友だちの活動を知ることができたと考える。また、実際にいろいろなものを型押ししてみても、どんな面白さ、楽しさがあったのか、友だちの見つけた形を見てどう思うかなど、お互いに聞き合うことで、さらに材料への興味や、形への気付きが深まった。

< 第2時：展示と鑑賞「1年2組すてきなかたちのはくぶつかん」 >



5 おわりに

児童たちの学びを「資質・能力」の観点で見ようとした時、各単元で培ってきた経験や学びが、以降に展開する別の教科の場面で発揮されたり、N君のように一つの単元の中で目まぐるしく複合して相互に作用するような姿を見せたりと、実に個々多様に見ることができる。彼らは将来的に上級学年、更に中学・高校へと上がるにつれて各教科が独立したものとして、学びを更に深めてゆくことになる。しかし、今、この低学年の時期に、様々な教科、また授業外での経験を往来して、自分のもつ力を自在に働かせる経験を積める環境こそが、将来の下支えになるのではないかと私は考える。図画工作の授業にとどまらず、他教科とのつながりにおいても、色や形への「見方・考え方」を深める児童の様子を受け、目の前の子どもたちの中に多様に存在する学びの連続性を今後も一層大切にしていきたい。また、子どもたちの経験の中で素朴に現れる「見方・考え方」の細やかな様子を、私たち教員が見出し、価値付けていくことこそが大切であると、この実践を通じて強く感じた。

※今回の研究は、上越教育大学の松尾大介氏、聖ヶ丘保育専門学校の羽田顕佑氏の協力のもと、実践いたしました。

*一連の実践を通して見えてきたこと：
小学校教育課程における、教科間の横断をふまえた学びの構造

「見方・考え方」は横断的な単元構成において、各教科の体験の中で複合的に、また個々多様なものとして見取ることができた。

各教科その他の学びを往来する環境こそが、多様な「資質・能力」を自在に働かせる”汎用性”の基礎として、特に架け橋期において保証されるべきかと思われる。

